伊墺の國境の戰爭は、大正五年の春まで捗々しいこともなかつたのですが、此の年の四月の上旬から墺太利は頻りに兵をチロールの西南部に集めて、その月の半になつて、三十餘萬の兵を以て、勇ましく伊太利軍に攻めかゝりました。其の方面の伊太利軍はこの時墺太利領に攻め入つて居たのですが、度々敵に打破られ、とう〳〵國境を越ねて、ヴェネチヤ平原に引き退ぞいたのです。敵は險しい山路ですから、重い大砲を引張りながら之を追つかけるのに大分困難しましたけれども、五月の末になつて、大分伊太利領へ入りこんで、アシヤゴの町を占領しました。

若し此の勢で、墺太利軍が、段々ヴェネチヤ平原を占領して行つたら、しまひにはイソンゾ河方面の伊太利軍の主力は、後の方の聯絡を打きられて、前も後も敵を受けるといふことになり、アドリヤ海の方に遁げ路でも求めなければ、遂には全滅するかも知れず、伊太利に取つて、實に大變な事になるはずだつたのです。

處が幸な事には、前述べた通り、丁度此の頃からして、露西亞軍の大進擊が始まつたので、墺太利はガリツィヤ方面を急に救はなければならぬことになり、伊太利方面から五六師團も引き拔いて向へ廻したのです。伊太利軍の方ではイソンゾ河の方面から援兵をトレンチノ方面へ廻しまして今度は伊太利軍の方が敵よりも餘程兵力が多くなりました。そこで早速敵に打てかゝり、一旦占領せられた地方を片ツ端から取り戻したのみならず一方イソンゾ方面でも八月四日から一度に攻擊を始めて、その月の九日に

は、こう〳〵ガリツィヤの町を陷れました。

〔七八〕獨逸海軍の態度

戰爭には無論のこと、陸戰と海戰とがあります。今度の世界大戰爭でも固より此の二つがあるのですが、私は今まで陸戰の方のことばかり述べて來ましたといふのは、今度の大戰爭では陸戰の方が主になつて、海戰の方は陸戰程花々しい戰が、澤山になかつたからであります。けれども若し一國と一國との間の小さな戰爭であつたら、大變に目立つ位の海戰も度々あつたのですが、陸戰の方が、あまり大きいものですから、海戰の方はその割に目立たないのです。だが、今度の樣な大戰爭になつては、海の上を自由に使ふ力のあるとなしとが、陸戰の上にも非常な關係を有つて居ます。

それで私共は十分に海の方のことも考へなければなりませぬ。

今度の大戰爭に、若しも英國が入つて居ないとしたら、海の方の模樣はズツト異つて居たに相違ありませぬ。獨逸の海軍は、大威張りに、アチラコチラと出かけて、敵國の海軍と花々しい海戰をやつたのでせう。處が海軍では世界の王ともいふべき英國が戰爭に加はつて居るものですから、獨逸の海軍は、之と當り前に立ち合つたんでは、メチヤ〳〵にやりつけられることは分り切つて居ます。それで戰爭の初から獨逸海軍は、大抵自分の國の港に引き込んで居て、できるだけ英國海軍とブツつからぬやうにして、唯英國海軍の眼を偸んでは時々恐々ながら出かける位ですから、陸戰程の大きな海戰がないのです。然し戰爭の起つた始めには、獨逸の海軍で支那の方に居たものがありましたので、それと英國海軍との間に、やがて海戰

が起りました。

〔七九〕 獨艦エムデンの狂暴　智利コロネル沖の海戰

獨逸は、豫て支那の膠州灣を足溜りにして、東洋の方面に力を伸ばさうとして居たので、軍艦を始終支那海方面に備へて、それが膠州灣に出入りして居たのです。處が今度の大戰爭が始まりますと、それ等の軍艦は、大抵膠州灣を脱け出して、南洋の方へ出かけて、敵國、中でも英國の商賣のための交通を妨げたのです。其等の獨逸軍艦の中でもエムデンといふのが一番廣く暴れ廻つて、英國の商船は、品物を取られたり、撃ち沈められたり、ヒドイ目に會つたのです。それで日本が獨逸を敵としてからは、英國の軍艦と力を合せて、此の暴れ艦を搜し廻りましたが、こう〳〵印度洋の

ココスといふ島の近處で見つかつて、英國の濠洲艦隊のシドニーといふ軍艦から撃ち据ゑられました。

大正三年九月、日本の海軍が、青島の沖合を封鎖したときは、獨逸の重な艦は、もう脱け出したあとで、小さな軍艦が九隻ほか殘つて居なかつたのです。日本の海軍は一方では、青島を包んで、その殘つて居る敵の軍艦が逃げ出ないやうにすると同時に、一方では英國の艦隊と力を合せて、南洋方面へ脱け出て居る敵の艦隊の行先を搜し廻りましたが、大正三年の十一月一日、南亞米利加の智利といふ國のコロネルといふ港の沖で、英國の艦隊が之とブッつかつたので、すぐに火蓋を切つて戰爭を始めましたが、不幸にして英國艦隊は敗けまして、モンマスとグード・ホープといふ二隻の巡洋艦は、沈んでしまひ、グラスゴーといふ艦はコロネルの港へ遁こみ

ました。獨逸の軍艦は五隻でしたが、大抵無事に、戰場から引き揚げて、智利のヴァルパライソの港へ入りました。

〔八〇〕フォークランド沖の海戰

智利のコロネル沖の海戰で、英國の艦隊を打破り、ヴァルパライソの港へ入つた獨逸の艦隊は、その後その港を出て、大西洋の方へ向つたのですが、それが大正三年十二月七日の朝、南亞米利加の南の端に近いフォークランド群島の沖で、英國の艦隊に見つけられたのです。英國艦隊司令官スタヂー中將は、今度こそは敵艦隊を是非やつ付けてやらうと思ひまして、すぐと大砲の火蓋を切りました。獨逸の艦隊も今度は運が盡きて、司令官スペーの乘つて居たシャルンホルストといふ艦を始め、グナイゼナウ、ライプチヒの三隻の巡洋艦が擊沈められ、石炭を積むための船二隻は分捕になりました。猶その他にニュルンベルヒと、ドレスデンといふ二隻の巡洋艦がありましたが、それは戰の最中に遁げ出しました。けれどもニュルンベルヒは英國艦隊が追ひ蒐けて擊ち沈めました。ドレスデンの方は、その後智利の沖合を、あちこち巡つて居たのを、大正四年の三月十四日に英艦が見つけ出しました。ドレスデンはチョット戰爭をして見ましたが、大變に打敗されて、火藥庫が破裂して沈んでしまひました。こんな譯で戰爭前から東洋の方へ出してあつた獨逸の艦隊は全滅したのです。

今度の大戰爭の起つたとき、歐羅巴大陸と阿弗利加大陸との間の地中海には、獨逸のゲーベン、ブレスラウといふ二隻の軍艦が居ましたが、マゴマゴして居ると、英國か佛國かの海軍に擊沈めらるゝか、分捕せらるゝこ

とは分り切つて居ます。それでダーダネルス海峽へ遁げ込んだのを、豫て獨逸贔負の土耳其が買取るといふ名前で、自分の海軍へ加へました。

〔八一〕獨逸潛水艇の跋扈

墺太利の海軍も、英國や佛國のに比べると弱いものですから、迚も大型の軍艦で、本當の海戰をする勇氣はなく、戰爭の初めから自分の國の港に隱れて居たのです。大正四年五月の下旬に、伊太利が墺太利と戰爭を開くことになつてから、墺太利艦隊が出かけて伊太利の海岸を砲擊したこともあるが、大した仕事も能きなかつたのです。

獨逸は、本當の海戰では、迚も英國の艦隊に敵はないと思つてるものですから、英國と獨逸との間の海即ち北海の方では、獨逸艦隊が、時たま敵の隙を窺がつては、チョツト出かけても、やがて自分の港へ引き込みますから、英國艦隊の方から度々出かけて、戰爭をしやうとしても、獨逸の方では相手になりませんでした。東の方の露西亞の艦隊は、獨逸も勝つ見込があるものですから、バルチック海の方へは時々出かけました。けれどもそちらでも大きな海戰は起らなかつたのです。

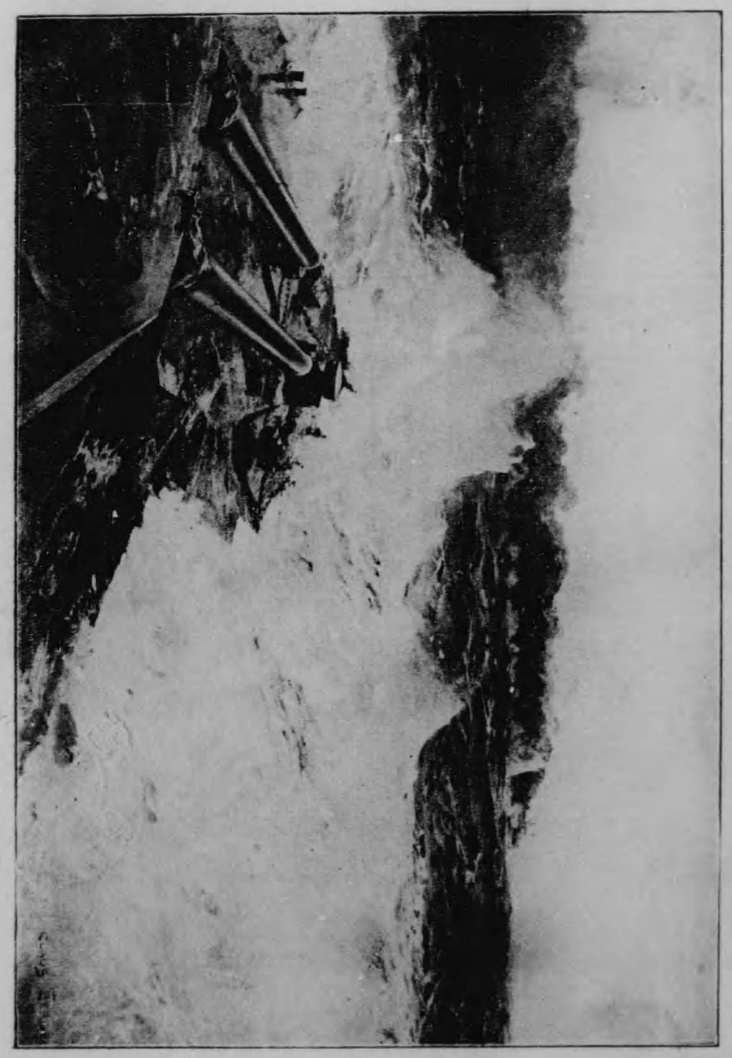
獨逸は、英國の海軍と本當の海戰は、できるだけ避けたのですが、しかし潛水艇で、不意に敵の艦を一隻でも多く沈めやうといふ考へで、初めは北海の大部分を、その潛水艇が潛り廻つて、交通を危なくして居たのですが、後にはその出たり沒れたりする場面が廣くなつて、英國の周圍は皆封鎖區域だと言つて、そこへ出入する船ならば、中立國の船でも打沈むるぞと宣言しました。それで英國の汽船の敵の潛水艇に擊沈めらるゝものが、

次第に多くなり、中には大正四年五月に打沈められたルシタニヤといふ三萬噸もある大船もありました。

〔八二〕 ユートランド沖の大海戰

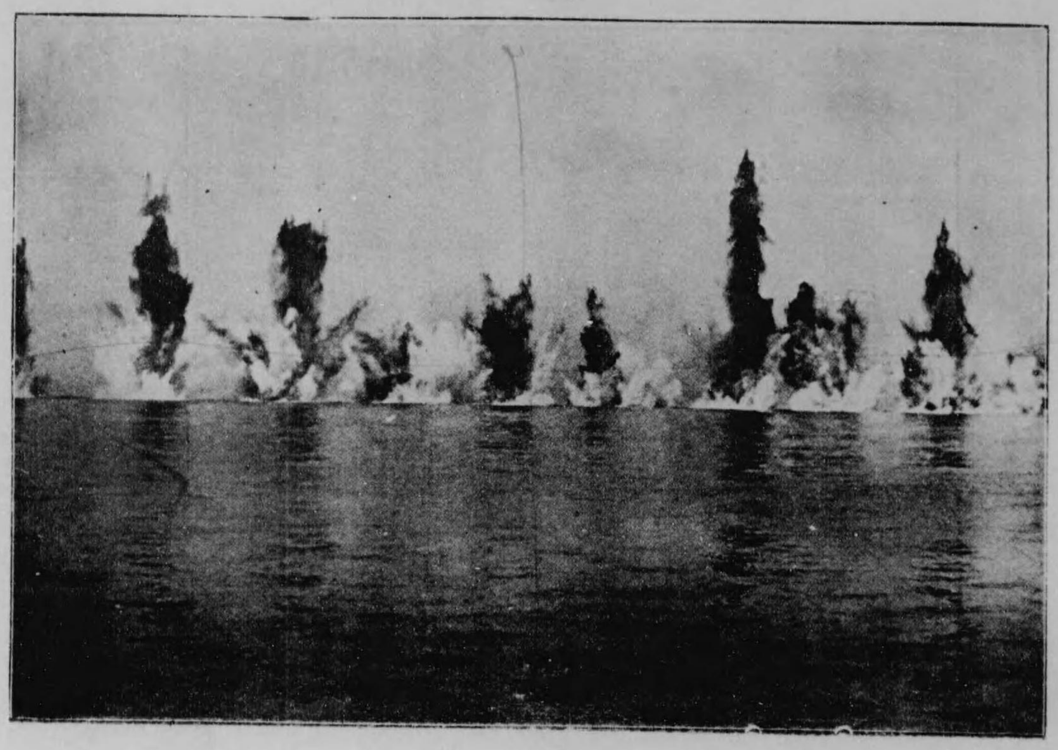
獨逸の海軍が、大體引き込んで居ますので、潜水艇の活動のために、聯合側、その中でも英國の汽船が盛に撃沈めらるゝ外には海戰らしい海戰も長い間起らなかつたのですが、大正五年五月三十日になつて、今度の戰爭始まつてこの方の、一番大きな海戰があつたのです。

此の日獨逸艦隊は、ヘリゴランド島――これは北海の内で、獨逸と丁抹の海岸に近い處にある小さな島で、獨逸が有つて居ます――から北海に現はれ、ヒッペル中將の率ゐる戰鬪巡洋艦隊が先頭に立ち、シェール中將の



ふ追を艦洋巡國英ていゐ働を海意艦軍逸獨
（畫插の誌雜逸獨）

す海掃てめしせ發爆を雷水械機るため沈の逸獨



率ゆる主力戰鬪艦隊がその後に續き、水雷艇隊やら、空中偵察隊なども、その中に加はつてゐたのです。午後三時過になつてヒッペル艦隊は、ユートランドの沖で、ビーチー中將の率ゆる英國の艦隊と衝突しました。するとヒッペル艦隊は、すぐに方向をかへて、シェール中將の主力艦隊の方へ引き退きました。英國艦隊はヒッペル艦隊の逃げ路を斷ち切る樣に南の方へ進みながら、敵艦隊と戰爭をやつて居る處へ、南の方から敵の主力艦隊が、深い霧の中から現はれて來ましたので、一時英國艦隊は、挾み擊に會ふた形になつて、大部困難な場合になつたのですが、その中にジェリコー大將の率ゆる英國の主力艦隊が、西北の方からやつて來て、敵艦隊に向つて火蓋を切つたのです。敵の方では、ツェッペリン飛行船で英國主力艦隊の近よるのを知つて居たやうで、とう〳〵決戰はやらないで、逃げてしまひ

ました。英國艦隊は之を追つかけて、獨逸軍港から百浬までの處まで行きました。此の大海戰で、敵も身方も大きな軍艦を大分失ひましたが、英國はもと〳〵獨逸に比べものにならぬほど、澤山艦があるのですから、此の海戰のために受けた打擊は、獨逸の方が無論大きいのです。

〔八三〕 世界に於ける英獨の競爭

今度の大戰爭が、世界の大戰爭といふのは、いろ〳〵の理由があるのです。一方から見れば、世界中に領地を廣く有つて居る英國が、之を失はないやうに勉めるのに、獨逸が段々新しい領地を廣め、又は領地を廣められない處では、英國がこれまで盛に行つてゐた商賣に喰ひ込んで、其の利益を奪はうとする處から起つた戰爭とも見らるゝのです。

英國は、早くから海軍が盛でしたから、其の海軍の力で、二三百年も前から世界中に領地を廣めました。それで英國の本國は、日本よりも小さいのですけれども、其の領地は世界の各大陸に跨つてゐまして、英國の領地には、太陽が沒しないと申して居ます。今の米國なども、英國の領地であつたのが、今から百三十年ばかり前に獨立したのですけれども、其の後英國はます〳〵領地を廣めたのです。

獨逸が纒まつた一つの國となつたのは、僅か四十幾年前のことで、それが世界に領地を廣め、世界の商賣を盛にやつて、英國と競爭を始めてからは、ヤット三十年にしかなりませぬ。けれども、此の短かい年月の間にも、獨逸の工業や商業の進んだことは非常なもので、英國はなか〳〵油斷ができなくなりました。それで今度の戰爭の始まるズット前からして、英國と

獨逸とは、商賣の上では世界中で戰爭をやつて居たので、兩方の國民は、始終睨み合つて居り、腹の中では互に惡み合つて居たのです。そこへ今度の大戰爭が始まつたので、若し英國が之を傍から眺めて居て、獨逸に勝たれでもしたら、英國の世界に於ける勢力に、ヒドク響くことになつたのでせう。

〔八四〕植民地の本國應援

英國を始め、佛國や、獨逸のやうな歐羅巴の强い國は、何れも世界の方々に領地を有つてゐて、之を植民地と申しますが、其の植民地には、本國とは異つた人民が住んで居て、それがそれ〴〵强い國々の支配を受けて居ます。その中には隨分本國を怨んで居るものもありますので、今度のやうな大戰爭になつて、植民地の人民が、本國に對してどんな風のことをやるかといふことは、戰爭の初めには隨分注意せられた問題であつたのです。が、此の問題は思ひの外に容易しく解けました。即ちどの國の植民地も、大體に於て本國を助けまして、今度の戰爭で、本國が困つて居るのを機會に謀叛をして、獨立を圖らうなどいふことは、先づ〳〵なかつたのです。

最も英國の領地である印度や、南阿弗利加の一部では少し騷ぎもありましたが、しかし一方では印度兵が、早く歐羅巴へ出かけて、英本國の兵と共に熱心に戰爭をやつて居ますし、南阿弗利加の英國植民地軍も、獨逸の植民地を攻め取りましたし、佛國の植民地アルジェリーの軍隊も、本國軍を援けて戰つて居るやうな譯で、聯合國が植民地の謀叛などを氣にしないで、一生懸命に歐羅巴の戰場で戰ふことのできることになつたのは、聯合

國に取つて仕合せと謂はねばなりませぬ。

英國人と異つた印度人や、其の他の人種でも、この通り本國を援くるので、況して、英國人と同人種の住んで居る濠洲とか、加奈陀のやうな英國植民地は熱心に本國のために働らくことになりました。

〔八五〕獨逸の植民地喪失

世界中の聯合國の植民地が、どれも本國のために力を盡すといふことであれば、獨逸の植民地はかあいさうなものです。といふ理由は獨逸の海軍は英國に適はないために、引き込んでゐるのですから、自分の植民地を援ふために兵を世界各地へ送り出すわけには參りませぬから、世界の方々に飛び〳〵に置いてある獨逸の守備兵や、他の一般の獨逸人などが一生懸命

に働いた處で、其の植民地を守り切れないことは分り切つて居るからです。

獨逸が三十年の間に、世界の舞臺へ割り込んで、手に入れた植民地は、阿弗利加の東と西との海岸にある隨分廣い地面と、太平洋の方では、支那の膠州灣と南洋のマーシャルとか、カロリンとか、ビスマルクとか、バラウとかいふ群島、それからニュー・ギニーといふ大きな島の三分の一許り等であつたのです。其の中で膠州灣が、日本軍に攻め落されたことは前に述べました。太平洋中の島々は赤道を境にして、其より南にあるのは英國、其の北にあるのは日本が、何れも大正三年の中に占領してしまひました。

阿弗利加にある獨逸の各植民地も、戰爭の始まると、やがて片ッ端から占領せられたのです。中でも英國の占領した處が一番廣いのですが、佛國や白耳義の植民地軍も、此の戰爭に加はつて居るのでして、阿弗利加の東海岸

にある獨逸植民地を攻め取るのには、白耳義植民地軍が大に骨折りました。

さういふ譯で、獨逸は歐羅巴の内では、敵國の地面を澤山占領しましたけれども、世界の植民地は、皆敵國から占領せられてしまひ、其の廣さは、獨逸が歐羅巴で占領してる處よりも、ズツト廣いのです。

皆さん、此の御話も隨分長くなりましたが、世界の大戰爭は、今もまだ續いてゐて、それがいつすむとも分りませぬ。私は大戰爭のすむときまで、此の御話をつづけるつもりでしたが、近いうちに亞米利加へ參ることになりましたので、こゝで一先づ筆を擱きます。一年位で歸るはずですから、其の上で又御話を續けませう。さよなら。（大正七年七月）

世界の大戰爭　未完

大正八年十一月五日印刷
大正八年十一月十日發行

定價金壹圓廿錢

著者　村川堅固
發行者　東京市京橋區具足町九番地　外山有也
印刷者　東京市京橋區具足町九番地　丸貴英郎
印刷所　東京市京橋區具足町九番地　日本印刷出版合資會社

不許複製

發行元　東京市京橋區具足町九番地　日本印刷出版合資會社
電話　京橋　三二四五番

9.3.22

384
119

終